島原天草一揆の経過

寛永十四(1637)年　六月頃

島原領内で西の雲が赤く焦がれ、火事のように見える現象や、桜の狂い咲き、数千匹の蛙の共食い、山犬のかみ合いなどの天変地異の現象が見られる。同時期に、元小西行長の家臣であった大矢野松右衛門ら5名は、深江辺りをまわり、25年前国外追放された宣教師が予言したことが起きているので、キリシタンに立ち帰るように勧めてまわる。

10日	家の庄屋、甚右衛門宅に、島原・南目の各村の庄屋が集合。
14日	島原および天草の代表、湯島で談合する。

寛永十四(1637)年　十月

15日	加津佐の寿庵により、「この廻文を村々の庄屋にまわし、庄屋は寿庵のもとに集まること。日本全国にわたってキリシタンにならないとキリスト教が再臨し最後の審判がある。異教徒でも元キリシタンでも早くキリシタンになること」といった内容の廻文がまわる。
島原領内の転びキリシタンが立ち帰りはじめる	
24日	有馬村キリスト教を棄教したキリシタン農民が再び信者となり、なかでも三吉と角内という百姓が集会を開いた。林小左衛門は足軽20名で、三吉・角内女子ども15名を捕縛した。
25日	有馬の農民が集会を開き、有馬村の代官林兵左衛門が押し入り、これに怒った村人により殺害される。もう一人の代官本間九郎左衛門同村を立ち退く。千々石村、串山の代官が小浜村で一揆勢に襲われ殺害される。島原北部の庄屋・農民は藩方に協力する。
26日	一揆勢は、村々の神社仏閣などを焼き払い、仏僧を殺害し、島原城を目指し進軍する。藩は、岡本新兵衛と多賀主水を大将とした鎮圧軍により制圧。(深江合戦)島原城へ引き揚げたところを付け入り、島原城下町へ火を放つ。
-有馬での騒動を聞き天草でも一揆が起こる- （天草四郎、島原の一揆の加勢をしたといわれている）	
28日	島原一揆軍勢、有馬（原城）に引きこもる。
29日	天草大矢野にて、一揆がおこる。
30日	天草岩屋泊村の農民73名キリシタンへの立ち帰りを拒否し、三角へ避難する。
天草四郎の姉婿渡辺小左衛門ら6名、四郎の母細川領内で捕らわれる。	

寛永十四(1637)年　十一月

9日	幕府、島原の乱の勃発を知る。協議の結果上使として板倉重昌、副使として石谷十蔵が任命される。江戸にいた松倉勝家にも領地に戻るように命令が下る。
10日	板倉重昌江戸を出発する。
12日	幕府、天草でも一揆が蜂起し唐津藩富岡城代の藩兵が劣勢にあるとの報告を受ける。一揆勢、天草楠甫へ上陸し村々に放火、後天草上津浦に集結。
この以後、一揆と幕府側の間で矢文のやりとりが始まる	
13日	一揆の船が天草上津浦へ行くのが目撃される。
14日	天草の上島にて唐津勢と一揆勢が合戦。唐津勢敗退し、富岡城代三宅藤兵衛、本渡にて討死。
16日	板倉重昌、細川藩に対して島原加勢と天草出兵を命じる。高瀬（玉名市）にて隣接諸大名の家老が集まり、対策会議開かれる。
17日	板倉重昌、伏見を出発する。
19日	富岡城、一揆勢に包囲される。
22日	一揆勢は再度富岡城を包囲攻略を試みるが、失敗し引き上げる。
23日	島原からの一揆は軍船で天草を退散した。四郎は島原勢の人数を率いて口之津へ、甚兵衛を大将とする天草の一揆は上津浦へ引き返す。
24日	松倉勝家、島原へ入る。
26日	板倉重昌、小倉に到着。
27日	幕府は第2の上使として松平信綱、副使として戸田氏鉄を任命する。（戦後処理と守備兵問題にあたるため。）
25日～翌1日までに大矢野、上津浦のキリシタン達は島原へ移動した	

寛永十四(1637)年　十二月

1 日	板倉重昌、肥後国高瀬（熊本県玉名市）に到着。島原の一揆勢、村々の飯米を原城内に運び入れる。口之津にあった藩の倉庫を襲い蔵米 5000 石、鉄砲 500 丁、弾薬などを奪い原城へ運び入れる。一揆勢、原城に集結し普請をはじめ、籠城の準備にかかる。
3 日	天草四郎時貞、原城に入る。松平信綱・兵 1,300 人・同心与力 200 余人、江戸を出発。（途中、近江より甲賀の忍び引率。）
5 日	幕府の上使板倉重昌、森岳城(島原城)に入る。
6 日	板倉重昌、諸藩｛鍋島、有馬(久留米)、立花｝を率いて原城に向かう。
8 日	四郎の父甚兵衛ら、一揆勢上津浦を出向いて原城へ向かう。
10 日	板倉重昌と長崎奉行榊原飛騨守 5 万余人により、一揆軍に向けて第 1 回の攻撃を開始するが敗北。
20 日	幕府軍、2 度目の総攻撃を行うが失敗。
27 日	松平信綱、下関に到着。

寛永十五(1638)年　一月

1 日	板倉重昌、総攻撃を開始。幕府軍、大敗北に終わる。
この日、板倉重昌戦死 「新玉の　年の初めに　散る花の名のみ残らば　さきがけと知れ」・・・手紙の一部	
4 日	松平信綱・戸田氏鉄、原城近くの幕府陣営に着陣。八代の細川立孝、出軍。
5 日	細川光利勢、原城に着陣。天草の警備にあたっていた小笠原備前、清田石見を有馬へ呼び寄せる。薩摩の島津勢・寺沢兵庫頭も有馬への出陣の指令を受ける。
7 日	江戸から目付兼松弥五左衛門正直が、将軍家光の命を諸将に伝える。
9 日	肥後細川勢、船手の大筒を陸へあげ、三の丸へ攻撃し城近くまで迫る。
11 日	金堀人を使いトンネルを掘らせ、原城を攻撃させたが失敗する。
このころ平戸のオランダ船が松平信綱の命令により、原城に到着	
27 日	細川勢仕寄、城際へ十八～十九間に迫る。
1/13～28　軍船からの砲撃は 128 発、石火矢台（大砲）からは 298 発、計 426 発だった	

寛永十五(1638)年　二月

3 日	大江の浜にて有馬五郎左衛門ら 4 名、一揆軍 5 名直接談判する。大江浜会談。（一揆側の内情を知ることができる。）
8 日	島細川藩家老、佐渡の兵により、三の丸城外の切り堀を埋める作業始まる。
15 日	幕府船手向井将監忠勝の嫡子五郎八正俊が江戸より参陣する。
このころから城内からの落人がたびたびある	
20 日頃	幕府全体の仕寄場・陣営（細川・立花などの築山）の構築が完了。
このころ一揆軍と幕府軍の間で矢文の交換が行われる	
22 日	一揆軍、夜襲をかける。黒田陣の仕寄場を急襲して、寺沢陣から鍋島本陣に進入し、仕寄場を焼き払った（夜討ち後、城内からの落人急増する）が、結果的には失敗に終わる。
24 日	幕府軍の評議が開かれ、総攻撃を 26 日に決定する。
26 日	総攻撃、雨により 28 日に延期される。

寛永十五(1638)年　三月

1 日	原城の本丸、石垣などが諸家の兵により崩された。
4 日	一揆の落人の山狩りが行われる。

寛永十五(1638)年　四月

12 日	島原城主松倉勝家、所領を没収美作国に預けられた後、7 月 19 日　斬首。
寺沢堅高は、天草領 4 万石を削られ、乱後 10 年後の正保 4 年自害する	